

立正の考古学



2021

立正大学博物館

ごあいさつ

「立正大学の考古学」は、昭和初期に原田淑人氏と石田茂作氏が考古学を講じたのに始まるが、とりわけ石田氏の影響が強く、仏教考古学が伝統的学風として定着した。

その後、石田氏に学んだ久保常晴教授は、板碑や仏具の研究に大きな業績を残し、「立正大学の考古学」の基礎を築いた。

ついで、坂詰秀一教授は、久保教授の学風を引継いで『板碑の総合研究』をはじめ膨大な数の著書をまとめるなど基礎的な研究を固めるとともに、釈迦の故郷を探るべくネパールでティラウラコット遺跡やルンビニー遺跡の発掘調査をおこなった。

さらに、坂詰教授の後継者である池上悟教授は、『石造供養塔論攷』などで石塔や墓標の研究を推進するとともに、中央アジアで仏教遺跡の発掘調査をおこなった。

このように、「立正大学の考古学」は、仏教考古学を主軸に据えたものであったが、卒業生たちは旧石器時代から現代までのさまざまなテーマに取り組んだ。

さて、今年度一杯で、池上教授が退職されるのを機に、「立正大学の考古学」の歴史を振り返る企画を立てた。「立正大学の考古学」の将来への展望を見据える機会としたと思う。

2021年3月15日

立正大学博物館長 時枝 務

目次

巻頭 「私の立正考古学人生」	立正大学博物館初代館長 坂詰秀一	1
はじめに		2
1 立正の考古学の系譜		3
「立正大学における考古学調査・研究」	立正大学博物館二代目館長 池上 悟	7
2 立正大学の調査・研究		8
3 卒業生の活躍		15
4 立正の考古学と博物館		19
5 立正の考古学のこれから		20
立正大学考古学研究室主要調査一覧		21

凡 例

- 1 本書は第15回特別展「立正の考古学」（会期：令和3年3月15日～3月30日）の展示図録である。
 - 2 本図録の作成は、館長時枝務のもと学芸員・足立佳代が執筆・編集した。
 - 3 「私の立正考古学人生」は坂詰秀一初代館長、「立正大学における考古学調査・研究」は池上悟二代目館長に玉稿を賜った。「5 立正の考古学のこれから」は時枝館長による執筆である。
 - 3 本図録に用いた挿図及び写真は、主に当館が刊行した図録等による。遺物写真の一部は足立が撮影した。
 - 4 本図録に用いた挿図の出典及び引用・参考文献は、巻末に掲げた。
 - 5 展示にあたっては、浅見幹雄（本館事務職員）が手伝った。
- 協力者 下記の方々、機関には特にご指導・ご協力いただきました。記して感謝いたします。
- 坂詰秀一初代館長 池上悟二代目館長
上野真由美 島田貴司 高橋杜人 吉水拓哉（敬称略・五十音順）
立正大学考古学研究室 立正大学学術情報課（図書館）

*本文中で敬称を略すなどしております。ご寛恕ください。

私の立正考古学人生

立正大学博物館初代館長
坂詰 秀一

1963年4月、立正大学文学部専任講師に採用され、以降、2006年3月に定年退職するまで43年間、立正大学で考古学担当の教員として奉職した。任用以前に5年間、副・助手を務めたので合算すれば48年間になるが、1948～'60年に立正中学・高等学校・立正大学・同大学院で学んだので、それを加えると計58年間、「大崎の谷山ヶ丘」に通ったことになる。

このように私の人生は「立正と伴」にあったと言える。立正中学～大学に入学したのは両親の希望。副手を兼ねた大学院の入学は私の希望（有高巖先生（東洋史教授）の副手任用は大学院で石田茂作先生の指導を受けることが条件）、助手採用は有高先生のご下命。講師採用は有高先生と伊木寿一先生（日本史教授）の推薦によるものであった。但し、専任講師の任用に際して石田茂作先生から「研究を続けたいなら博物館がよい。大学は教育が主で研究は従であることを知るのが肝要」とお言葉をいただいたことは忘れられない。

専任講師に採用され、担当したのは「一般教養・歴史」。主題を何にしたらよいのか判断に迷ったが「日本文化史」と定めた。石田先生が立正大学での講義題目を「仏教文化史」とすればよいとのご示唆を得て定めたことを拝聴していたのにあやかっただけである。どうにか2年間の担当任務をすませて3年目以降「考古学演習」「考古学実習」の担当に頂いた。

演習はともかく、実習には参った。久保常晴先生（考古学教授）から「野外一発掘、室内一遺物実測ほか」をとの指示を得たからである。発掘経費は無く、遺物もほとんど無い。これには途方にくれた。遺物（石器・土器類）は私の収集品（高校生の頃からの採集）によって辛うじて格好をつけたが（現在博物館に

大学活性化へ内外から期待

日本考古学界の重鎮として活躍する坂詰秀一（一様・計八百人取寄）が、四月一日付で同大学の学長に就任した。学長の重責を担うこと。氏は一九八三年から文学部長を六年間、九四年からの四年間は企画・施設担当の常理事を務めた。この間、熊谷キャンパスにわが国で初めての



ひと

新設された地球環境科学部には、最新の設備を配備した実験・研究棟を完成させるなど、その手配は実証済み。

「当大学初めての理科系の学部である地球環境学部を軌道に乗せようとが、当部の課題。さらに、社会福祉学部の学生の実習をさるるうちに、熊谷キャンパスの隣接地に特別養老ホームをつくる計画です。仏教系の大学ですから、地球環境と福祉とくに力をいれていきたいと思います。その時代を迎えた大学の活性化に向け、学内外から大きな期待が寄せられている。」

1998. 4. 3 読売新聞（夕刊）

坂詰先生の学長就任を報じる新聞記事

寄贈）、発掘はどうするか。夏季休暇に実施するにはどうしたらよいか。思案の末、助手時代から手掛けていた古代窯跡の発掘と定めた。文部省科学研究費の交付研究と連動して埼玉・東京・山形・長野のほか、北は青森、南は福岡の須恵器・瓦窯跡を発掘した。また、受講生の希望により旧石器～近世の諸遺跡（貝塚・古墳・集落跡など）を実習の対象とし発掘を実施してきた。

一方、中村瑞隆先生（仏教学部教授）主宰のネパールの釈尊の遺跡の発掘に参画した。日蓮宗寺院・企業などの協力を求めて調査経費捻出に東奔西走した10年間の思い出が去来する。

日頃の発掘行が崇ってか、文学部長・常任理事、はては学長職に狩り出される始末、管理職生活は18年に及んだ。石田先生の「大学は教育」のお言葉に「学内行政」が加わった。ただ、その間、考古学関係の雑誌・講座・辞典などの編集に参画し、多くの卒業生に執筆の機会を確保することが出来たのは幸いであつた。

考古学の「研究」は無為に過ぎたが、立正大考古の「教育」の一端は不十分ながら担うことが出来たのではないかと。しかし、こればかりは後の世の評価に委ねざるを得ない。

はじめに

立正大学の考古学は、昭和5（1930）年の「考古学懇談会」の発足が淵源で、今年で90年になります。考古学懇談会は当時非常勤講師として昭和2（1927）年より教鞭をとられていた石田茂作先生、原田淑人先生が顧問となっていました。その後、「考古学懇談会」は「考古学研究会」に改称され、昭和7（1932）年には「立正大学考古学会」となり、機関紙『銅鐸』を5月30日に創刊します。創刊号には、本田茂一、齋藤武一、佐野眞祥、八木直道、矢追隆家、久保常晴の各論考が掲載され、奥付には立正大学考古学会會代表者として「矢追隆家」と記されています。

『考古学入門』三部作の刊行、日蓮聖人降誕会記念の「考古学会遺物展覧会」開催などの活動のほか、昭和7年、史学研究室から

「標本室」への遺物陳列所の移設などにも関わりました。その後も「土偶土版展覧会」、「古瓦展覧会」等を開催しています。

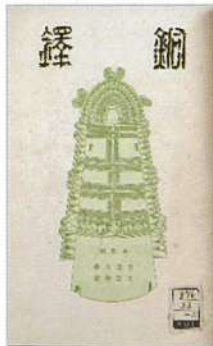
『銅鐸』に掲載されている活動記録を見ると、下沼部貝塚や久ヶ原遺跡の踏査、発掘の他、石田先生の指導による板碑や宝篋印塔の調査や拓本採集などのほか、会員間の研究発表などの活動を行っていた様子が伺えます。

『銅鐸』の発行は第7輯一時絶えましたが、戦後の物資が不足するなか、昭和27（1952）年に再開し、昭和33（1958）年の第14号まで続けました。立正大学考古学会としてはその後『考古学論究』を平成3（1991）に創刊し、現在まで続いています。

考古学研究室での調査・研究報告は、『立正大学文学部考古学研究室調査報告』『立正大学考古学研究室彙報』などを継続して刊行しているほか、遺跡ごとに発掘調査報告書を刊行しています。



『銅鐸』 創刊号



第2号



『考古学入門』三部作



『銅鐸』 第8号



日蓮聖人降誕会記念の
考古学会遺物展覧会目録



久ヶ原遺跡出土 壺形土器

1 立正の考古学の系譜



石田茂作【1894～1977】

立正大学における考古学研究の基礎を築かれたのは石田茂作先生です。先生は中学校、東京帝室博物館勤務の傍ら、大正 12 (1923) 年に島地大等博士の推挙により立正大学に出講され、「仏教文化史」の講義を受けもたれました。以後、奈良国立博物館に赴任されてからも集中講義をされ、退官後も引き続き出講されました。

先生の高弟である久保常晴先生は下記のように石田先生について述べています。「先生は、四十余年にわたり教室においてのみでなく、ある時は、自宅で、帝室博物館で、ある時は厳冬の戸外で見学・発掘の指導にと、教へて倦まず、導いて飽かず、今日の本科の発展に尽くされたのである。」(久保 1964)

石田先生は明治 27 (1894) 年愛知県岡崎に生まれ、大正 11 (1922) 年に東京高等師範学校を卒業後、私立本郷中学校を経て、大正

14 (1925) 年より東京帝室博物館に勤務されました。昭和 32～40 年には奈良国立博物館に館長として赴任されました。

石田先生は、法隆寺再建・非再建論争に終止符を打ったことで知られています。法隆寺については創建年代に関する史料はみられませんが、『日本書紀』などの史料に天智天皇 9 年に焼失した記録があり、明治 20 年代以来、法隆寺再建説、非再建設で論争がありました。1939 (昭和 14) 年、先生の主導による発掘調査で法隆寺若草伽藍の痕跡が発見されたのです。

その後も仏教に関する考古学研究を追及され、仏教考古学という一つの分野を確立されました。

立正大学に考古学の講座ができたのは、戦後になってからです。昭和 22 (1947) 年、立正大学専門部講師として久保常晴先生が赴任され考古学の講座が開設されたのです。

北海道旭川市に生まれた久保常晴先生は、立正大学予科を経て立正大学文学部史学科に入学、昭和 9 (1934) 年に卒業されました。卒業後は史学研究科の副手・助手を務められたあと、一時大学を離れ、昭和 22 (1947) 年より専門部講師、23 年予科講師、24 年文学部助教授として考古学の講座を受け持つこととなりました。

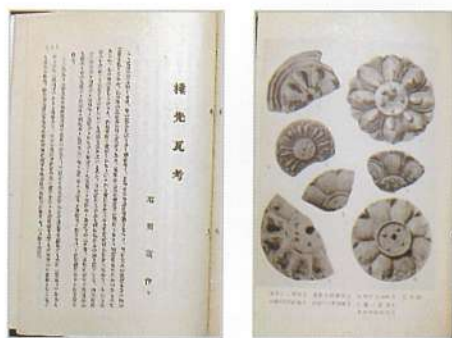
北海道の縄文遺跡や樺太の遺跡の調査をされた久保先生は、石田先生の指導により、中世板石供養塔婆を卒業論文で扱われ、石田先生の高弟として仏教考古学研究



『伽藍論攷』



『佛教考古學論攷』



「樺先瓦考」『銅鐸』第 7 号



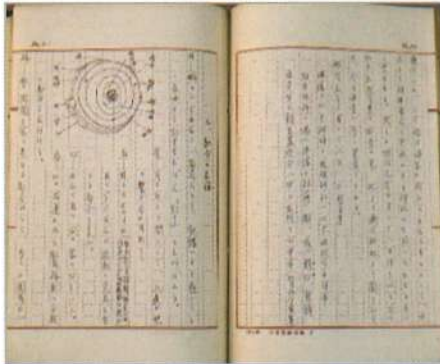
久保常晴先生【1907～1978】



坂詰秀一先生

を進め、仏教遺物に多くあらわされている「私年号」を研究して文学博士の学位を取得されました。久保先生によって「仏教考古学」を特徴とする立正考古は確立されたといえるでしょう。久保先生の研究は、「考古学資料と文献史料とを有機的に関連付けて論証する方法に大きな特色を有してい」（坂詰1967）ます。昭和42（1967）年から10年間にわたって実施したネパール王国の仏教遺跡・ティラウラ・コット遺跡の調査を主導されたのも大きな業績のひとつです。

久保先生の研究を受け継ぎ、立正の考古学を発展させたのは坂詰秀一先生です。昭和11（1936）年東京都葛飾柴又に生まれた坂詰秀一先生は、昭和23（1948）年に立正中学に入学、昭和33（1958）年に立正高校を卒業、立正大学文学部史学科入学、昭和35（1960）年に立正大学大学院修士課程を修了されました。高校時代から考古学を研究し、現在立正大学考古学研究会で刊行されている『立正考古』は、高校時代の坂詰先生が創



『佛教考古學研究』原稿



立正大学博物館開館を報じる新聞記事



『日本私年号の研究』



『佛教考古學研究』



『日野市坂西横穴墓』



『仏教考古学の構想
その視覚と実践』

刊された雑誌です。

その後、史学科助手、講師、助教授を歴任され久保先生を支えられるとともに、古代窯業址を中心に全国各地の遺跡の発掘調査を実施され、研究、教育に邁進されました。

昭和 52 (1977) 年には立正大学考古学の二代目教授となられ、平成 3 (1991) 年には「歴史考古学の視覚と実践研究」により文学博士の学位を得られました。研究、教育だけでなく学内行政にもあたられ、平成 10 (1998) 年には第 27 代学長に選出され、平成 14 (2002) 年には熊谷キャンパスに立正大学博物館を開設されました。

縄文文化の研究から始め、歴史考古学、仏教考古学研究を主導された坂詰先生は、考古学史への関心も深められ、その成果を発表されています。近年では「観光考古学」を提唱され、「文化財の保存と活用」を先駆けたものと注目されています。

立正大学の三代目考古学教員として立正の考古学を率いたのは、池上悟先生です。

池上先生は昭和 25 (1950) 年、鳥取県東伯郡下中山村に生まれ、鳥取県立米子東高校卒業後、昭和 48 (1973) 年中央大学文学部史学科を卒業し、昭和 52 (1977) 年立正大学大学院を修了されました。日野市教育委員会の学芸員として勤務後、昭和 57 (1982) 年に非常勤講師として、昭和 58 (1983) 年からは専任講師として立正大学文学部に着任されました。以来、平成 5 (1993) 年に助教授、平成 13 (2001) 年には教授として考古学研究室を率いました。



池上悟先生

池上先生は、古墳時代研究、中でも特に横穴墓をその研究テーマとして長年にわたって調査・研究を続けられ、平成 16 (2004) 年には『日本横穴墓の形成と展開』により博士号を授与されました。

平成 10 年前後から、石造物の調査・研究に邁進され、『石造供養塔論攷』をまとめられています。各地の石造物調査をもとに、中世から近世の石造物について考察しています。近年では、江戸時代の大名墓、旗本墓やその家臣の墓を調査し、それらは、『東日本における近世墓石の調査』として継続して成果がまとめられています。

平成 26 (2014) 年からはウズベキスタン学術調査隊の副隊長として（平成 30 年からは隊長として）、仏教遺跡カラ・テペ遺跡、ズルマラ仏塔の調査を主導し報告書をまとめています。

立正大学博物館館長としても平成 18 (2006) 年～27 (2015) 年、平成 27 年～30 (2018) 年は博物館担当副学長としてその運営に携わってこられました。



『先学に学ぶ日本考古学』



『鳴謝の考古人生』



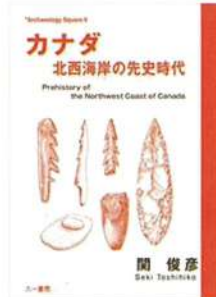
『日本横穴墓の形成と展開』



『石造供養塔論攷』



関俊彦先生 2021『カナダ 北西海岸の先史時代』



また、昭和 57 年に着任以来、発掘現場や石造物調査の現場で学生を指揮・指導されています。多くの学生は、そうした現場で鍛えられ、地方自治体や埋蔵文化財センターなどの最前線で活躍しています。

平成 18(2006) 年には時枝務先生が着任されました。石田先生、久保先生、坂詰先生、池上先生、時枝先生と代々考古学研究室を中心となって率いてこられた先生方とともに、立正の考古学を支えてこられた先生方もいらっしゃる。

丸子亘先生は、久保先生の立正大学考古学会後輩として『銅鐸』の執筆・編集に関わり、戦後は立正大学文学部助教授として調査・研究、後身の育成に携わってこられました。

関俊彦先生は、立正高校、立正大学卒業後、大学院に進学され弥生文化の研究をされました。立正大学の助手としてネパールの仏跡朝も参加されています。その後、立正大学講師として、坂詰先生が学長の時代には特任教授も務められました。海外の考古学研究の翻訳、北米先住民の考古学誌研究を進められ、数多くの著書を上梓されています。

昭和 53 年(1978)、熊谷キャンパス開設に伴う事前の発掘調査が必要となり、熊谷校地遺跡調査室が設けられ、そこに野村幸希先生が専任講師として赴任されました。校地内の発掘調査により縄文時代早期の集落跡等数々の成果を挙げられました。歴史時代の「塚」の研究をまとめられています。阪田正一先生は、千葉県教育委員会勤務の傍ら非常勤講師として出講され、その後は特任教授として指導されました。板碑研究でも成果を発

表されています。考古学実習では、発掘調査だけでなく、竹花宏之先生の指導により土器作りの実習も行われ、熊谷キャンパスでは博物館の協力の下、土器焼き実習が実施されました。

博物館学芸員養成課程では、丸子先生、野村先生、上野恵司先生、阪田先生、久保田正寿先生、紺野英二先生が博物館学芸員を目指す学生を指導しています。

そのほか、齋藤忠先生、江坂輝彌先生、吉田格先生が長きに渡って、大学院、学部で指導してくださいました。石田茂作先生からつながる国立博物館からは三木文雄先生、三宅敏之先生、関秀夫先生といった方々が出講されています。



『立正考古』第 14 号



野村幸希先生 1992



阪田正一先生 2008



時枝務先生 2005



熊谷キャンパスでの土器焼き実習

立正大学における考古学調査・研究

立正大学二代目館長
池上 悟

立正大学で、30年間ほどは横穴墓、群集墳を対象として調査してきた。東京都日野市の坂西横穴墓群、多摩市の中和田横穴墓群は大学院生時代に調査したものである。横浜市の熊ヶ谷横穴墓群、熊ヶ谷東横穴墓群は線刻壁画、群構成を考える調査であった。更に千葉県下総町の西大須賀古墳、栃木県宇都宮市の長岡百穴の調査も中山晋さんの斡旋で調査してきた。これらの調査により、遠藤政孝、大谷徹、松本昌久、上野恵司さんなどが横穴墓を研究するようになり、同世代の小高幸男、近野正幸、梶ヶ山真理、西原崇浩さんなども後期古墳を研究対象とするようになった。また福島県の大竹憲治、神奈川県鈴木一男、茨城県の稲田健一さんなども横穴墓を研究しており、ここに後期古墳研究を、立正考古学の一つの特徴として形成できたものと思っている。

また30年ほど前から、中・近世の石造物の調査も行ってきた。品川区の法禅寺石塔の調査をはじめとして、島根県石見銀山の世界遺産登録のための石造物調査は、立正同窓のト部吉博さんの斡旋によるものであった。当初は学生10人以上が実習を兼ねて調査し、今に継続している。千葉県の旧佐原市所在板



昭和51年 中和田横穴墓にて
(右：遠藤政孝さん、左：水本雄三さん、
撮影：竹花宏之さん)

碑の調査は荒井世志紀さんのお世話によるものであり、所在約千基のうち八百基ほどの拓本を採り下総型板碑の主体を調査した。この整理は山梨にいる一瀬さんが行い、紺野英二さんが手伝った。

栃木県足利市所在石造物の調査は、同窓の足立さんの世話であり、中世石塔を主対象として10年間ほど実施した。足利氏関連石塔、小形安山岩板碑などと特徴的な石造物があった。

次いで群馬県桐生市の黒保根地区の石造物の調査は、群馬県の唐沢至朗さんが仲介され、同窓の増田修、新井雅幸さんにお世話になった。江戸時代の廟墓、墓石を主体とした調査である。これら各地の石造物の調査も、最近の立正考古学の特徴となったものと思う。板碑・石造物を研究対象とする同窓として、足立佳代、本間岳人、関口慶久、村山卓、砂生智江、池田奈緒子さんなどが育った。

近年は、特に江戸時代の墓石調査をおこなってきた。品川区東海寺所在の肥後熊本藩54万石藩主の細川家墓所の調査は当時の品川区立歴史館長であった坂詰先生の指示によるものであった。北区城官寺の医師多紀家墓所は、東京都史跡に指定されたものである。池上本門寺境内墓地所在墓石の調査は、本間岳人さんのお世話になった。江戸に入って創案された尖頂舟形墓石を百基実測して、その様相をまとめた。その他、旗本墓所、尾張藩重臣墓所など『東国における近世墓石の調査』を7冊刊行した。この分野の調査も実習を兼ねて行った部分が多く、近年の立正考古学の特徴として位置づけたい。



石造物調査

2 立正の調査・研究

前述したように、戦前の立正大学の考古学研究は、考古学研究会のメンバー中心となって大学周辺の遺跡での小規模な発掘調査、遺物採集、石造物の調査などが実施されました。

立正大学における考古学研究が本格化したのは戦後、久保常晴先生が着任されてからで、昭和 20～30 年代には先史時代の遺跡の調査が盛んに行われました。

朝日遺跡は、神奈川県で初めて発掘された旧石器時代の遺跡で、獅子文六の小説『箱根山』に登場する遺跡として有名です。

石神貝塚は、昭和 29～30 年に B 貝塚が立正大学考古学会と川口市教育委員会によって調査されました。標高 16～20m の台地上に位置する縄文時代後期から晩期の貝塚です。土偶や耳飾等が出土し、注目されました。



石器：旧石器時代（朝日遺跡：箱根町）



みみずく土偶



器台

（石神貝塚：川口市）

【古代窯業遺跡の調査・研究】

立正大学の考古学研究の一つの柱として古代窯業遺跡の調査・研究が上げられます。昭和 30～50 年代にかけて、文部省科学研究費等により北は青森県・前田野目窯跡から、南は福岡県・平田窯跡まで、全国的に発掘調査を実施し、古代窯業の実態を明らかにする上で大きな役割を果たすことができました。

特に埼玉県内では、南比企窯跡群、東金子窯跡群の発掘調査は大きな成果を上げることができました。

◆南比企窯跡群

鳩山町を中心に嵐山町、ときがわ町、東松山市の一部に広がっています。6 世紀初



須恵器 短頸壺（虫草山窯跡：鳩山町）



虫草山 A-1 号窯



南比企窯跡群の分布図



東金子窯跡群の分布図

頭～10 世紀前半頃まで操業された須恵器や瓦の生産遺跡です。立正大学考古学研究室では、亀ノ原窯跡、新沼窯跡、能瀬ヶ沢窯跡、鶴巻（将軍沢）窯跡、虫草山窯跡、山田（赤沼）窯跡、奥田（宮ノ前）窯跡の発掘調査を実施しています。

南比企窯跡群の中心地である新沼・金沢・天沼は、武蔵国分寺の創建瓦の生産窯であり、新沼窯跡からは武蔵国 21 郡中の 16 郡の郡名瓦が出土しています。隣接する虫草山、宮ノ前など調査では、国分寺創建とほぼ同時期の須恵器生産窯の調査によりこの時期の須恵器形態の一端が明らかにされています。

◆東金子窯跡群

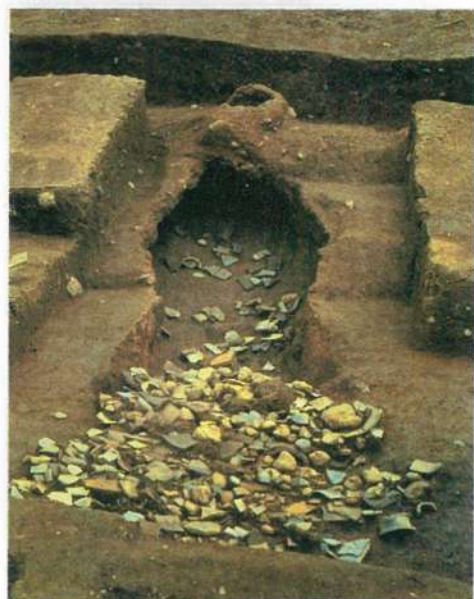
窯跡群周辺から出土する瓦が武蔵国分寺の塔跡出土の文様瓦と同範瓦であるという事実に基づき、この塔跡が『続日本紀』の承和(845)年3月23日条に見える「再建塔」に対応するものとの見通しにより調査が開始されました。昭和38(1963)年から断続して昭和55(1988)年まで新久窯跡・八瀬里工房跡、谷津池窯跡・谷津池工房跡、八坂前窯跡の発掘調査が実施されました。

その結果、新久窯跡、八坂前窯跡は国分寺再建塔の造瓦のために生産が開始されたものと考えられること、国分寺再建塔の瓦と同時期の須恵器形態を認識することにより、

編年の基準を得ることができました。



軒丸瓦・軒平瓦（新久窯跡：入間市）



八坂前第6号窯

【古墳・横穴墓の調査・研究】

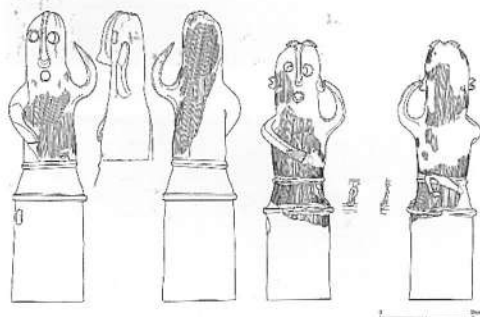
立正大学では戦前から、およそ3世紀～7世紀の墳墓である古墳や横穴墓の調査が続けられてきました。なかでも野原古墳群は注目すべき古墳です。

◆野原古墳群の調査

立正大学博物館の南西、和田川に南面する江南台地の縁辺に位置する野原古墳は、昭和5(1930)年の開墾中に「踊る埴輪」として知られる2体の人物埴輪が出土しました。昭和37(1962)年にこの古墳が発掘調査され、全長40mの前方後円墳で、後円部と前方部に凝灰岩の切石を用いた横穴式石室が構築されていたことが判明しました。

昭和39(1964)年には立正大学考古学研究室によって8基の円墳が発掘調査され、現在、23基の古墳が確認されています。立正大学が調査した古墳はいずれも6世紀後半から7世紀前半に築造された円墳です。

野原古墳群は、40mの前方後円墳を盟主墳として造営された群集墳で、消滅した古墳も含めて30基ほどで構成されていたと考



野原古墳出土「踊る埴輪」



須恵器フラスコ形細頸瓶（野原古墳群 17号墳）



野原古墳群と埴輪窯跡位置図

えられます。そしてその造営は、4～5基を単位群とする6つの単位群が営まれ、6世紀後半代から古墳時代終末期である7世紀前半代に盛期を迎える群集墳であることが明らかにされました。



17号墳石室 遺物出土状況



野原古墳群発掘調査状況

◆機神山古墳群

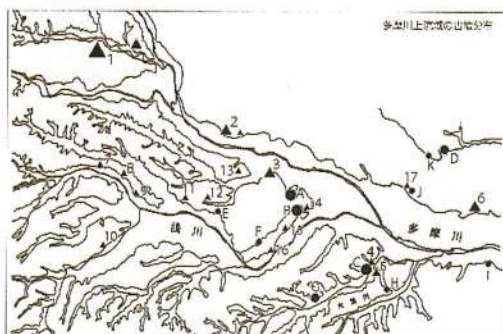
近年では、機神山古墳群の調査が実施されています。この古墳群は、栃木県足利市のほぼ中央に位置する機神山に所在する前方後円墳3基、円墳13基からなる群集墳です。調査では山稜の西に展開する20～26号墳の調査を実施しました。

24 号墳は長林寺裏古墳とも称され、明治末年、高橋健自によって発掘され、双龍文環頭柄頭等の出土が知られていました。この時の調査は、長林寺の檀家であつた足利の考古学者・丸山瓦全が依頼したものでした。

立正大学では平成 23～25(2011～2013) 年にかけて、測量、発掘調査を実施しました。その結果、24 号墳の墳丘にはチャートの割石の葺石があること、石室は奥壁近くに最大幅を持つ胴張り形であること、7 世紀前半、古墳時代終末期の円墳であることなどが確認されました。また、石室の大きさや形から、高橋健自が調査した古墳にほぼ間違いないことが明らかとなりました。



機神山 24 号墳石室発掘状況



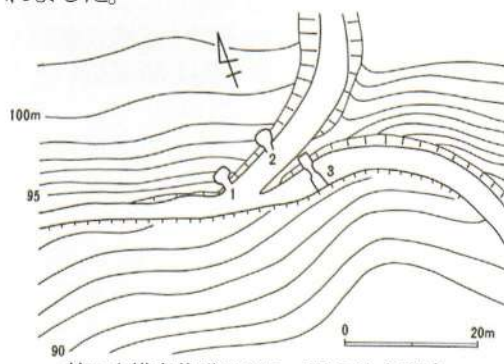
9. 雁行古站群 10. 洪二、斜塘古站群 11. 沙塘古站群 12. 万源古站群 13. 螺山古站群 14. 曹家湾站群
15. 黄川古站群 16. 牛山古站群 17. 磨盘古站群 18. 朝山古站群 19. 横山古站群 20. 北人山古站群 21. 双山古站群
22. 塔山古站群 23. 竹园古站群 24. 田山古站群 25. 草市古站群 A. 洞庭湖古站群 B. 长兴山古站群
C. 平桥、平溪古站群 D. 团山寺、磨盘古站群 E. 大桥山古站群 F. 平山古站群 G. TAT No.448 站群 H. TAT No.34 站群
I. TAT No.51 站群 J. 黄泥湾古站群 K. 西塘山古站群

多摩川上流域の古墳分布図

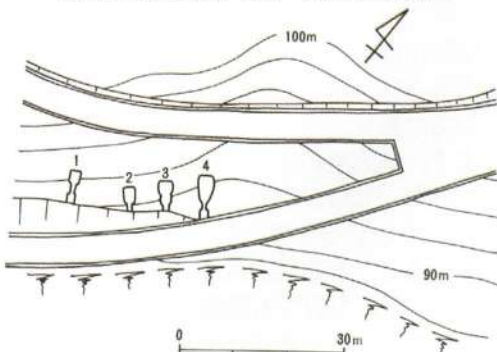
横穴墓群は、特に多摩川上流域の多摩地区において精力的に調査が進められてきました。日野市・梵天山横穴墓群、同・坂西横穴墓群、多摩市・中和田横穴墓群で大きな成果を挙げています。神奈川県の多摩丘陵地域では、熊ヶ谷横穴墓群、熊ヶ谷東横穴墓群の発掘調査、大磯丘陵では、横穴墓の分布調査を実施しています。

◆梵天山横穴墓群

多摩川に面する日野台地の南側斜面のローム層を掘削して展開する横穴墓群である梵天山横穴墓群は、周辺の谷ノ上、神明上横穴墓群を含めると 50 基以上が分布していると推定されています。J R 中央線の複線化にともなう発掘調査が 5 回以上実施され、立正大学考古学研究室では、昭和 41(1966) 年、48(1973) 年に実施しました。2 回の調査で 7 基の横穴墓を調査し、墓前城の壁面に川原石を小口積みした特徴的な横穴墓が確認されました。これは、群中の盟主墓と位置づけられました。



梵天山横穴墓群平面図 昭和41年調査



梵天山横穴墓群平面図 昭和48年調査



梵天山横穴墓1号墓墓前域

また、内部構造が複室胴張りから矩形平面形へと変遷過程が明らかで、複室胴張り構造は、周辺地域における高塚古墳の首長墓の横穴式石室の内部構造を写したものと考えられます。

銀装の大刀、飛燕型式の鉄鏃、土師器坏などが出土し、7世紀終末に近い時期まで横穴墓が造営されていたと推定されています。

◆中和田横穴墓群

多摩川の支流である大栗川によって開析された台地の南斜面に展開する横穴墓群です。周辺に展開する横穴墓は50基近いと考えられています。昭和20(1945)年、三木文雄による調査を端緒として、立正大学考古学研究室では昭和51(1976)年に14基を確認しました。

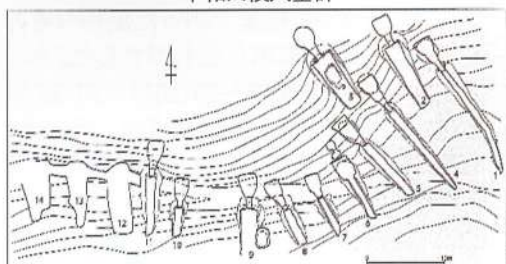
横穴墓が展開する台地縁辺には6世紀末から7世紀にかけて築造された万蔵院台古墳群が位置し、大栗川の対岸には7世紀前半の首長墓である稲荷塚古墳、臼井塚古墳が築造されています。

中和田横穴墓群は、斜面に並列して横穴墓が構築され、それぞれの墓道が緩斜面である東側では長く、急斜面の西側では短くなっています。横穴墓の構造は①複室胴張り構造、②矩形ないしは長方形玄室平面横穴墓、③奥壁を最大とする玄室台形平面横穴墓の順に変遷することが確認されています。この変遷は、坂西横穴墓群でも同様であり、7世紀代の当地域における変遷と考えられます。

出土遺物は、7世紀中葉から8世紀代にか



中和田横穴墓群



中和田横穴墓群平面図



8号墓遺物出土状況

けての須恵器、土師器、武器類があります。武器類のうち、上部に2個の小円孔を穿った鏢を伴う直刀が注目されます。この種の直刀は、房総半島に集中しています。中和田横穴墓群から出土したこの特徴的な直刀も房総半島で7世紀代に製作された可能性が高く、地域間交流を示すものと理解できます。

また、被葬者の人骨が6、8、9、10、11号墓から出土しています。その様相から、中和田横穴墓群においては、個別横穴墓内における埋葬の完結が認められ、先葬者の人骨を玄室隅に片付けて集積し、追葬者を伸展葬とすることが確認されています。

【海外仏跡の調査・研究】

立正大学は仏教系総合大学として国内屈指の伝統を誇ります。仏教を基幹とする教育は、これまで変わることなく基本理念となっています。立正大学ではこの理念のもと、海外の仏教遺跡の調査を実施しています。

立正大学インド・ネパール仏跡調査団によって、昭和42～52（1967～77）年から10年間、8回にわたってネパールのティラウラ・コット遺跡の調査が続けられました。

釈迦の生誕地として知られているルンビニー遺跡では、（財）全日本仏経会による1993年から10年間に及ぶ発掘調査で「印石」が発掘され、1997年に世界遺産に登録されています。発掘調査には、立正大学非常勤講師であった上坂悟氏が委嘱されました。

◆ティラウラ・コット遺跡の調査

ティラウラ・コット遺跡は、ネパール王国の南部、インドとの国境に近いルンビニー州タウリハワーに位置しています。

釈迦が青年時代を過ごし、出家を決意し

たカピラヴァストゥ（カピラ城）の推定地の一つです。

調査の結果、東西約450m、南北約500m、南北に長軸をもつ長方形を呈する城塞遺跡であることが再確認されました。周囲にレンガの壁をめぐらし、4つ以上の門、2つの貯水池、8つの建物跡が所在することも明らかにされました。検出された遺構は建物跡、井戸、埋葬遺構等です。そして、当遺跡がマウリヤ朝（B.C.4世紀）～クシャーナ朝（A.D.3世紀中葉）頃であることが明らかになりました。

出土遺物は土器、土偶、煉瓦、鉄製釘・棒・鏃、青銅製容器・装飾品・腕輪・鈴、石製容器・針、そして貨銭など非常に多様です。中でも、北方黒色磨研土器の出土は、当遺跡が、釈迦の時代にまで遡りうることを明らかにしました。この地域の城塞遺跡で、北方黒色磨研土器が出土している遺跡はティラウラ・コット遺跡のみです。その為、この調査により本遺跡がカピラヴァストゥである蓋然性をより高めたと言うことが出来ます。



四大仏跡とアショーカ王詔勅碑分布図



第1次調査団メンバー



調査の様子



黒灰色土器（シュンガ朝）



テラコッタ・動物（シュンガ朝・クシャーナ朝）



ティラウラ・コット遺跡



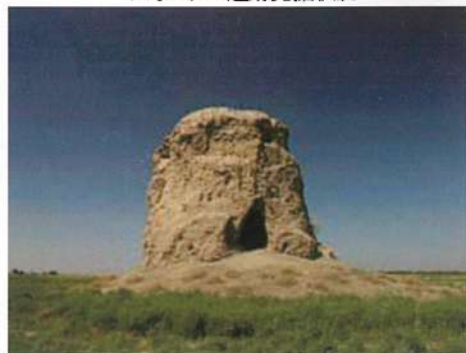
テルメズ位置図



カラ・テペ遺跡平面図



カラ・テペ遺跡発掘状況



ズルマラ仏塔

◆ウズベキスタン仏跡調査

平成 26 (2014) ～30 (2018) 年、に仏教学部と文学部の関係教員が中心となり立正大学学術調査隊が組織され、ウズベキスタン共和国スルハンダリヤ州テルメズ西郊のカラ・テペ仏教伽藍址北丘コンプレックスの発掘調査、出土品整理調査等を実施しました。

調査の結果、北丘伽藍僧院区の西側回廊の幅が 4.7m と大規模であること、回廊の北端が西に屈曲していることが明らかとなり、別の僧院の存在の可能性も示唆されます。北川仏塔では、No.52 室から壁画の一部が確認されました。

平成 28 (2016) 年からは、クシャン期創建とされるズルマラ仏塔の調査を並行して行いました。

【熊谷校地内遺跡の調査】

熊谷市の南、江南台地上にある立正大学熊谷キャンパスは、昭和 41 (1966) に開設されました。校舎等の施設の建設に伴い、埋蔵文化財が確認され、約 35 万㎡という広大な敷地にこれまで旧石器時代から近世までの遺跡が調査されました。



C地点発掘の様子 (昭和 54 年)



X地点出土の旧石器

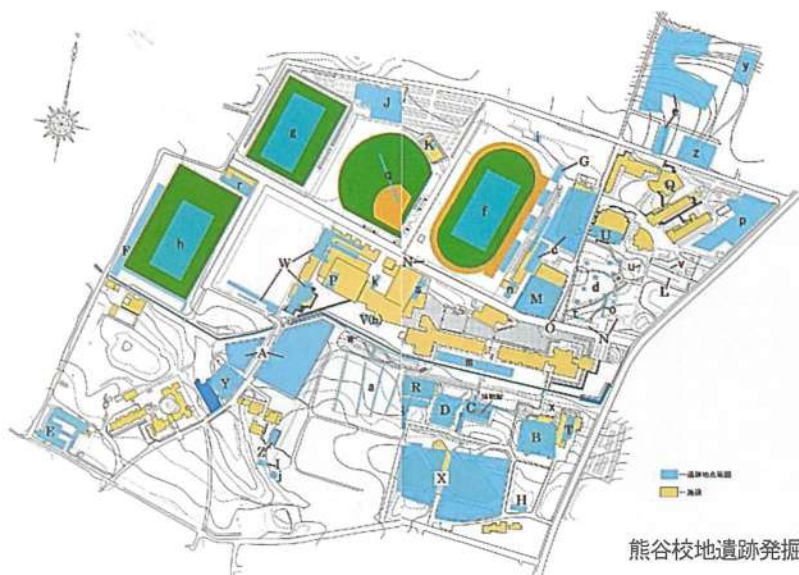
特にX地点から出土した旧石器、R地点の縄文時代早期の尖底土器は注目されます。また、古代の集落や近世土坑墓群、隣接する増田氏館跡 (文殊寺境内) に関係すると思われる中世遺構、遺物等が確認され、江南台地という恵まれた環境では、古くから人々が集落を営み、活動していたことが明らかにされました。



R地点第1号住居出土 尖底土器



A地点第1号竪穴住居跡出土土器



熊谷校地遺跡発掘調査位置図

3 卒業生の活躍

立正大学考古学研究室からは数々の卒業生が旅立ちました。

戦前は卒業生の多くが僧侶や教員となって郷里へ戻り地域での研究を続けられました。太平洋戦争により、大学での研究活動がままならなくなり、兵役に応召された方々もいらっしやいました。立正大学考古学会会員では、江本三郎、旭寛行、本化呉郎、犬飼六男、寺嶋政義、小林存慈の6名が戦争でなくなれたことが記録されています。

戦後は、教職の傍ら考古学の調査や研究を続け、郷土史研究家として活躍した方も多くいらっしやいました。

高度経済成長期には全国で開発の伴う遺跡の発掘調査が増加しました。大学の研究室や各地の遺跡調査団だけでなく、自治体や調査事業団などの機関で発掘調査が実施されるようになりました。それに伴い、考古学を学んだ学生が全国各地に就職するようになりました。現在多くの卒業生が文化財行政や埋蔵文化財調査機関などで活躍しています。

【第1期】

久保先生とともに立正大学で学び、石田先生の薫陶を受けた世代を紹介します。

齋藤武一氏(1909～1996)は明治42(1909)年、旭川で生まれました。昭和7(1932)年に立正大学専門部高等師範科国語漢文科に入学、昭和10(1935)年に満州国法院書記



齋藤武一氏



河口貞徳氏

官、昭和14(1939)年に満州国立博物館奉天分館を経て熱河省立博物館に勤務、終戦を迎えました。戦後は郷里の旭川で高校教員として勤務の傍ら市内及び周辺の遺跡の調査を行いました。昭和42(1967)年から46(71)年には北海道教育大学旭川分校にて考古学を教え、昭和48(1973)年には神奈川県相模原市に移住し立正大学講師となりました。

河口貞徳氏(1909～2011)は、昭和17(194)年に立正大学を卒業後、郷里の鹿児島市の高等学校教員として勤務する傍ら南九州の遺跡の発掘調査を行いました。昭和24(1949)年には鹿児島県考古学会創設に尽力し、県内の考古学研究の発展、文化財保護に大きく寄与しました。

藺田芳雄氏(1912～1976)は、昭和12(1937)年に立正大学高等師範部地歴科に入学後に兵役、代用教員などを経て昭和20(1945)年立正大学を卒業しました。卒業後は郷里の桐生市内の県立高校に勤務しながら桐生市を中心とした周辺地域の発掘調査を行いました。特に千網谷戸遺跡の調査は著名で、出土した土器を千網式土器として設定し縄



「石器時代の土器に就て」『銅鐸』第2号



河口貞徳 1988



藺田芳雄 1954



千網谷戸遺跡調査時の園田芳雄氏と山内清男氏



吉田格氏



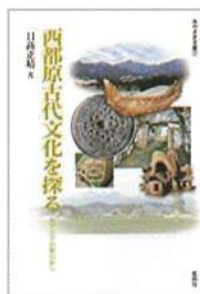
日高正晴氏

代晩期の標識遺跡として知られています。現在出土品の一部は重要文化財に指定されています。

吉田格氏（1920～2006）は、鳥取県に生まれ、その後東京府豊島郡滝野川町に転出しました。昭和 13（1938）年立正大学専門部歴史地理科に入学後、昭和 16（1941）年 12 月に繰り上げ卒業、昭和 17（1942）年に応召。昭和 21（1946）年には日本考古学研究所研究員、武蔵野文化協会職員などを経て昭和 33（1958）年に東京と主事となりました。吉田氏は各地の縄文遺跡や貝塚の調査で、花輪台式や称名寺式などの土器型式を設定された



吉田格 1990



日高正晴 2003

ことなどで著名です。平成元（1989）年には長年にわたる調査研究により得られた縄文時代の資料を中心とした収蔵品を立正大学に寄贈されました。

日高正晴氏（1922～2009）は、宮崎県西都市に生まれ、昭和 22（1947）年に立正大学文学部史学科を卒業しました。その後郷里の宮崎県で、西都原古墳研究所長、西都原資料館・館長を務め、西都原古墳群の調査・研究を進め、保存にも尽力しました。

【第 2 期】

戦後、久保先生の指導の下、坂詰先生とともに立正の考古学を学び、古代窯跡の調査・研究等に参加した世代です。卒業生の多くは地域での考古学研究、調査に携わり、指導的立場で活躍しています。



佐藤安平 1987



村田文夫 2016



上野精志 1985



渋谷忠章 2007



藤田富士夫 1992



唐澤至朗 2018



大竹憲治 1996



鈴木一男 2014



諏訪間順 2019



金子浩之 2016



米沢容一 2010



八木光則 2010



北郷泰道 2005



利部修 2017



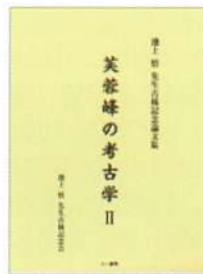
上野川勝 2018



遠藤政孝 2012



『考古学の諸相IV
坂詰秀一先生傘寿記念
論文集』



『芙蓉峰の考古学II
池上悟先生古稀記念
論文集』



時枝務 2005



佐藤由紀男 1999



森清治 2019



水澤幸一 2011



稲田健一 2019

【第3期】

坂詰先生が教授として、池上先生が助教授、教授として学生を指導しました。特に卒業生の多くは、地方自治体や埋蔵文化財センター等の調査機関で活躍しています。

平成 28 (2016) 年に刊行した『考古学の諸相IV 坂詰秀一先生傘寿記念論文集』には 38 名の、令和 2 (2020) 年刊行の『芙蓉峰の考古学II 池上悟先生古稀記念論文集』では 52 名の卒業生が論文を献呈しています。

テーマは、仏教考古学にとどまらず、先史時代、古墳時代、中・近世、外国考古学等幅広い研究成果が掲載されています。

4 立正の考古学と博物館

立正大学博物館は平成14(2002)年4月に開館しました。収蔵・展示品は、撫石庵コレクション、吉田格コレクションなど個人の収集品が寄贈されたものが核の一つとなっています。吉田格コレクションは、平成元(1989)年、吉田氏が長年にわたる調査研究により得られた縄文時代を中心とした資料を立正大学に寄贈されたものです。

一方で、博物館の収蔵資料は、これまで紹介してきた立正大学考古学研究室によって発掘調査された出土品が大半を占めています。古代窯業遺跡出土資料には、南比企窯跡群、東金子窯跡群だけでなく、山形県・荒沢窯跡、広島県・青水窯跡、群馬県・金山窯跡、上小友窯跡等の出土品があります。

立正考古黎明期に原田淑人先生が寄贈された甕、中国鏡、石田茂作先生寄贈の古瓦、瓦経などもあり、立正大学における考古学研究の歴史を感じさせます。

立正大学博物館開館に当たっては、坂詰秀一初代館長はもとより、館長の手足となって初代学芸員の上野恵司氏が尽力しました。上野学芸員は展示ケースの設計から展示構成、特別展、企画展の企画・開催に至るまで館長の意を汲みながら作り上げ、現在の博物館の基礎を築きました。

一方で、博物館学芸員課程講師として学生の指導にもあたりました。明るく、面倒見の良い人柄は多くの学生、後輩たちに慕われました。

上野氏は、昭和37(1962)年、栃木県に生まれ、昭和56(1981)年に栃木県立氏家高等学校を卒業されました。翌年立正大学文学部史学科に入学、昭和61(1986)年卒業、卒業論文は「下野における横穴墓研究の課題」でした。平成元年に立正大学大学院修士課程を修了し、千葉県佐原市教育委員会に奉職、平



ポンペイでの上野恵司氏

『東国古墳文化論攷—上野恵司先生著作集』より



上野恵司 2008

『東国古墳文化論攷—
上野恵司先生著作集』

成4(1992)年には退職して立正大学大学院博士後期課程に進まれました。平成5(1993)年からは財団法人古代学協会・古代学研究所研究員としてイタリア・ポンペイの遺跡調査をされました。その後立正大学非常勤講師、立正大学学園嘱託(熊谷校地遺跡調査室)を経て平成14年から立正大学特任講師、立正大学博物館専門員として活躍されました。

専門である古墳時代にとどまらず、博物館のコレクションである古鍾、博物館学についての研究も進められ、将来を期待されていましたが、平成17(2005)年に惜しくも逝去されました。

立正大学博物館を取り巻く環境は年々厳しくなっています。貴重な資料を収蔵・展示する施設として将来にわたる調査・研究の継続が求められます。

5 立正の考古学のこれから

立正大学博物館
館長 時枝 務

立正大学の考古学の歴史については、日本考古学協会第78回総会が、平成24年5月26・27日両日にわたって、立正大学品川校舎で開催されたのを記念して刊行された『立正考古学の歩み(II)』に詳しい。同書には、坂詰秀一元学長が1920年から2002年まで、池上悟教授が2003年から2012年までを分担して動向を記しており、通読すれば1920年から2012年までの歴史を容易に知ることができる。

同書で、立正大学の考古学を特徴付ける分野として強調されているのは、いうまでもなく仏教考古学である。石田茂作氏によって立正大学にもたらされた仏教考古学は石田氏の教え子の久保常晴教授に継承されて板碑や仏具の研究に目覚しい業績を残した。さらに、坂詰元学長によって発展的展開がなされ、釈迦の故郷を探求する考古学的調査をおこなうまでに至った。その流れは、池上氏に継承され、石塔や近世墓標の型式学的研究に始まり、中央アジアの仏跡の発掘調査にまで及んだ。また、石塔の研究は、阪田正一氏や本間岳人氏らによって続けられ、立正考古学の柱の一つとなっている。

立正大学の考古学のもう一つの特色は、発掘調査を重視する野外考古学の伝統で、当然地域考古学の担い手を多く輩出した。早くは吉田格氏が縄文遺跡の発掘を多数手がけたが、称名寺貝塚で特徴的な土器を検出して称名寺式を制定するなど、その成果は目覚しい



立正大学考古学研究室 1997 2012



立正大学考古学会
2021



立正大学考古学研究会
2019

ものがあつた。立正大学で考古学を専攻した多くの先輩諸氏は、郷里に帰って埋蔵文化財関係の職に就き、その地域の考古学を牽引した。お名前を掲げることができないほど、多くの方が活躍され、地味ではあるが確実な業績を積まれたことに敬意を表したい。地域考古学は立正考古学のもう一つの柱といってよい。

立正大学の考古学の未来を予測するなら仏教考古学の伝統は一部の篤志家によって今後も継承されていくであろうが、徐々に重きをなしていくのは地域考古学の伝統ではなかろうか。北海道から沖縄まで、立正大学で考古学を学んだ同窓の活躍が知られており、今後もその流れは絶えないと思われる。その点、坂詰元学長が地域文化功労者として表彰されていることは、将来を暗示する出来事といってよい。

立正大学考古学研究室主要調査一覧

遺跡名	調査年度	掲載報告書
千葉県・築地台貝塚	昭和 24 年 1949	久保常晴「千葉県築地台貝塚」 『日本考古学年報』二 昭和 29 年 1954
千葉県・築地台貝塚	昭和 25 年 1950	久保常晴「千葉県築地台貝塚」 『日本考古学年報』三 昭和 30 年 1955
神奈川県・加瀬第三号墳	昭和 26 年 1951	久保常晴「川崎市加瀬山第三号墳発掘報告」 『銅鐸』第 8 号 昭和 27 年 1952
千葉県・長熊廃寺	昭和 26 年 1951	「千葉県印旛郡長熊廃寺址発掘調査報告」 『銅鐸』第 9 号 昭和 27 年 1952
神奈川県・源東院貝塚	昭和 26 年 1951	坂詰秀一「横浜市港北区源東院貝塚」 『銅鐸』第 10 号 昭和 29 年 1954
東京都・居木橋貝塚	昭和 28 年 1953	久保常晴「東京都品川区居木橋貝塚」 『日本考古学年報』6 昭和 38 年 1963
埼玉県・石神貝塚 (第 1 次)	昭和 29 年 1954	坂詰秀一「川口市石神貝塚第 1 次調査予報」 『銅鐸』第 11 号 昭和 30 年 1955
埼玉県・小谷場貝塚	昭和 30 年 1955	坂詰秀一「埼玉県川口市小谷場貝塚」 『立正考古』第 13 号 昭和 32 年 1957
埼玉県・石神貝塚	昭和 30 年 1955	坂詰秀一「埼玉県川口市石神貝塚」 『日本考古学年報』8 昭和 34 年 1959
千葉県・荘台遺跡	昭和 32 年 1957	坂詰秀一「千葉県君津郡荘台遺跡」 『日本考古学年報』10 昭和 38 年 1963
神奈川県・町畑遺跡	昭和 32 年 1957	坂詰秀一「神奈川県小田原市町畑遺跡」 『上代文化』第 19 輯 昭和 34 年 1959
埼玉県・五明遺跡	昭和 33 年 1958	坂詰秀一「埼玉県中野原における敷石遺跡」 『古代文化』第 2 巻第 2 号 昭和 36 年 1961
神奈川県・権現台遺跡	昭和 33 年 1958	久保常晴・坂詰秀一「神奈川県川崎市権現台遺跡」 『日本考古学年報』11 昭和 38 年 1963
千葉県・天南廟山遺跡	昭和 33 年 1958	坂詰秀一「千葉県天南廟山祭祀遺跡」 『立正史学』第 23 号 昭和 34 年 1959
埼玉県・亀ノ原窯跡	昭和 33 年 1958	久保常晴・高畠正人・坂詰秀一「南比企窯業遺跡群」 『立正大学考古学研究室小報』第 1 冊 昭和 36 年 1961
神奈川県・狩野遺跡	昭和 33 年 1958	坂詰秀一「神奈川県狩野配石遺跡」 『立正大学文学部論叢』第 15 号 昭和 43 年 1968
埼玉県・新沼窯跡	昭和 34 年 1959	久保常晴・坂詰秀一「武蔵比企丘陵窯業関係遺跡調査概報Ⅱ」 『日本考古学協会第 27 系総会発表要旨』 昭和 36 年 1961
神奈川県・新作貝塚	昭和 34 年 1959	坂詰秀一「川崎市新作貝塚」 『川崎市文化財調査報告』第 1 集 昭和 38 年 1963
埼玉県・虫草山窯跡 (第 1 次)	昭和 35 年 1960	久保常晴・坂詰秀一「武蔵丘陵窯業関係遺跡調査概報Ⅲ」 『日本考古学協会昭和 39 年度大会発表要旨』 昭和 36 年 196
千葉県・塚原古墳群	昭和 35 年 1960	坂詰秀一「千葉県塚原古墳群の調査」 『古代文化』4-3 昭和 35 年 1960
千葉県・横宿廃寺	昭和 35 年 1960	坂詰秀一「千葉県横宿古瓦出土遺跡の調査」 『古代文化』第 5 巻第 1 号 昭和 35 年 1960
東京都・前野町遺跡	昭和 36 年 1961	坂詰秀一・関俊彦「東京都前野町遺跡における弥生時代竪穴の調査」 『武蔵野』第 41 巻第 2 号 昭和 37 年 1962
神奈川県・朝日遺跡	昭和 36 年 1961	坂詰秀一「芦ノ湯の旧石器時代遺跡」 『箱根町誌』第 1 巻 昭和 37 年 1962
山形県・荒沢窯跡	昭和 37 年 1962	坂詰秀一「鶴岡市における古窯跡調査の意義」 『立正考古』第 21 号 昭和 37 年 1962
山形県・町沢田窯跡	昭和 37 年 1962	久保常晴・坂詰秀一「庄内地方における古代窯業遺跡の調査」 『日本考古学協会昭和 37 年度大会研究発表要旨』 昭和 37 年 1962
千葉県・寒風遺跡	昭和 37 年 1962	坂詰秀一・関俊彦「中和倉寒風遺跡」 『松戸市文化財調査報告』第 1 集 昭和 38 年 1963

遺跡名	調査年度	掲載報告書
千葉県・寒風遺跡	昭和 37 年 1962	坂詰秀一・関俊彦「中和倉寒風遺跡」 『松戸市文化財調査報告』第 1 集 昭和 38 年 1963
神奈川県・平川遺跡	昭和 37 年 1962	坂詰秀一「武蔵桂田丘陵生産遺跡の調査」 『古代文化』第 8 巻第 5 号 昭和 37 年 1962
長野県・御牧ノ上窯跡 (第 1 次)	昭和 37 年 1962	坂詰秀一「長野県北佐久郡御牧ノ上窯跡」 『日本考古学年報』15 昭和 38 年 1963
神奈川県・加瀬山遺跡	昭和 37 年	坂詰秀一「神奈川県川崎市加瀬山遺跡」 『日本考古学年報』20 昭和 38 年 1963
埼玉県・新久窯跡(第 1 次)	昭和 38 年	坂詰秀一編『武蔵新久窯跡』 昭和 48 年 1973
埼玉県・新座遺跡	昭和 38 年	坂詰秀一『新座』 昭和 40 年 1965
山形県・金山遺跡	昭和 38 年	坂詰秀一「古代窯業の実態」 『科学読売』第 15 巻第 12 号 昭和 38 年 1963
長野県・御牧ノ上窯跡 (第 2 次)	昭和 38 年	坂詰秀一「長野県北佐久郡御牧ノ上窯跡」 『日本考古学年報』16 昭和 43 年 1968
長野県・八重原窯跡	昭和 38 年	坂詰秀一「八重原窯跡」『長野県視』考古資料編 昭和 57 年 1982
埼玉県・谷津池窯跡	昭和 39 年 1964	坂詰秀一「埼玉県入間郡東金子窯跡の研究」 『台地研究』第 15 号 昭和 39 年 1964
栃木県・乙女不動原瓦窯跡 (第 1 次)	昭和 39 年 1964	坂詰秀一「乙女不動原瓦窯跡確認調査報告」 『立正大学考古学研究室集報』第 17 号 昭和 52 年 1977
群馬県・上小友窯跡	昭和 39 年 1964	坂詰秀一「上野・上小友窯跡」 『立正大学文学部論叢』第 22 号 昭和 43 年 1968
群馬県・金山瓦窯跡	昭和 39 年 1964	坂詰秀一「上野・金山瓦窯跡」 『立正大学考古学研究室小報』第 8 冊 昭和 41 年 1966
神奈川県・駒ヶ岳山頂遺跡	昭和 39 年	坂詰秀一「駒ヶ岳山頂遺跡」『箱根町誌』第 1 巻 昭和 44 年 1969
埼玉県・野原古墳群	昭和 39 年 1964	坂詰秀一「埼玉県大里郡野原古墳群」 『日本考古学年報』17 昭和 44 年 1969 立正大学博物館『野原古墳群発掘調査報告書』平成 20 年 2008
山梨県・下夏狩、十日市場、 小形山遺跡	昭和 39 年 1964	久保常晴ほか『中央高速自動車道建設に伴う発掘調査』 昭和 39 年 1964
神奈川県・白井坂窯跡	昭和 40 年 1965	坂詰秀一「白井坂埴輪窯跡」 『武蔵野』第 44 巻第 2・3 号 昭和 40 年 1965
広島県・青水窯跡	昭和 40 年 1965	坂詰秀一「広島県世羅町青水窯跡」 『日本考古学年報』18 昭和 45 年 1970
神奈川県・岡上廃堂	昭和 40 年 1965	坂詰秀一「神奈川県川崎市岡上廃堂跡」 『日本考古学年報』18 昭和 45 年 1970
東京都・山崎遺跡	昭和 40 年 1965	久保常晴・坂詰秀一「町田市山崎遺跡」 『立正大学考古学研究室小報』第 2 冊 昭和 40 年 1965
神奈川県・不動台遺跡	昭和 40 年 1965	久保常晴「神奈川県川崎市不動台遺跡」 『日本考古学年報』18 昭和 45 年 1970
長野県・豊郷遺跡	昭和 40 年 1965	『野沢温泉村史』 昭和 49 年 1974
長野県・七ヶ巻遺跡		
長野県・東大滝遺跡		
長野県・平林遺跡	昭和 41 年 1966	
長野県・岡ノ峰遺跡		
長野県・虫生遺跡		
長野県・前坂遺跡		
神奈川県・箱根三所権現社 跡	昭和 41 年 1966	坂詰秀一「箱根三所権現社跡」 『箱根町誌』第 2 巻 昭和 49 年 1974
埼玉県・谷津池瓦窯跡		坂詰秀一「新発見の瓦の工房跡」 『考古学ジャーナル』第 1 号 昭和 41 年 1966
千葉県・藤崎堀込貝塚		習志野市教育委員会「習志野市藤崎堀込貝塚」 『立正大学考古学研究室小報』第 6 冊 昭和 41 年 1966

遺跡名	調査年度	掲載報告書
茨城県・前浦遺跡	昭和42年 1967	坂詰秀一「前浦祭祀遺跡」 『茨城県資料』考古資料編 昭和49年1974 立正大学博物館『浮島前浦遺跡・原古墳群発掘調査報告』 平成22年2010
東京都・本町田遺跡	昭和42～43年 1967～68	立正大学考古学研究室『本町田』 (「立正大学考古学研究室報告」1) 昭和44年1969
ネパール・ティラウラコッ ト遺跡(第1次)	昭和42～43年 1967～68	中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一編 『TILAKURAKOT II』 昭和52年1977 『TILAKURAKOT I』 平成12年2000
青森県・前田野目窯跡(鞠ノ 沢、砂田・第1次)	昭和43年 1968	坂詰秀一編『津軽・前田野目窯跡』 昭和44年1969
東京都・梵天山横穴墓群	昭和43年 1968	久保常晴・是光吉基「日野市梵天山横穴古墳群」 『立正大学考古学研究室小報』第10冊 昭和43年1968
ネパール・ティラウラコッ ト遺跡(第2次)	昭和43～44年 1968～69	中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一編 『TILAKURAKOT II』 昭和52年1977 『TILAKURAKOT I』 平成12年2000
埼玉県・新久窯跡(第2次)	昭和44年	坂詰秀一『武蔵新久窯跡』 昭和48年1973
埼玉県・虫草山窯跡 (第2次)	昭和45年 1970	坂詰秀一「武蔵・虫草山窯跡」 『立正大学考古学研究室集報』第18号 昭和52年1977
東京都・神明上遺跡 (第1次)	昭和45年 1970	「神明上遺跡」I 『立正大学考古学研究室小報』第11冊 昭和46年1971
東京都・神明上遺跡 (第2次)	昭和45年 1970	「神明上遺跡」II 『立正大学考古学研究室小報』第12冊 昭和46年1971
ネパール・ティラウラコッ ト遺跡(第3次)	昭和45～46年 1970～71	中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一編 『TILAKURAKOT II』 昭和52年1977 『TILAKURAKOT I』 平成12年2000
茨城県・磯部遺跡	昭和45年 1970	野村幸希「磯部遺跡」 『立正大学考古学研究室小報』第13冊 昭和47年1972
東京都・神明上遺跡(第3次)	昭和46年 1971	「神明上遺跡」III 『立正大学考古学研究室小報』第14冊 昭和48年1973
静岡県・手石製鉄遺跡	昭和46年 1971	久保常晴「伊豆・手石製鉄遺跡」 『日本考古学年報』24 昭和48年1973
ネパール・ティラウラコッ ト遺跡(第4次)	昭和46～47年 1971～72	中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一編 『TILAKURAKOT II』 昭和52年1977 『TILAKURAKOT I』 平成12年2000
青森県・持子沢窯跡 (A・B地点)	昭和47年 1972	坂詰秀一「津軽持子沢窯跡調査概報」 『北奥古代文化』第5号 昭和48年1973
福岡県・平田窯跡	昭和47年1972	坂詰秀一編『筑前平田窯跡』 昭和48年1973
青森県・持子沢窯跡(D地点)	昭和48年 1973	坂詰秀一「津軽持子沢窯跡の第二次調査」 『考古学ジャーナル』第98号 昭和48年1973
東京都・梵天山横穴墓群	昭和48年1973	坂詰秀一編『日野市梵天山横穴墓』 昭和48年1973
ネパール・ティラウラコッ ト遺跡(第5次)	昭和48～49年 1973～74	中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一編 『TILAKURAKOT II』 昭和52年1977 『TILAKURAKOT I』 平成12年2000
ネパール・ティラウラコッ ト遺跡(第6次)	昭和49～50年 1974～75	中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一編 『TILAKURAKOT II』 昭和52年1977 『TILAKURAKOT I』 平成12年2000
東京都・神明上遺跡(第4～ 7次)	昭和50年 1975	「神明上遺跡」IV 『立正大学考古学研究室小報』第15冊 昭和51年1976
ネパール・ティラウラコッ ト遺跡(第7次)	昭和51～52年 1976～77	中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一編 『TILAKURAKOT II』 昭和52年1977 『TILAKURAKOT I』 平成12年2000
東京都・高幡台遺跡	昭和51年 1976	「高幡台遺跡」 『立正大学考古学研究室小報』第16冊 昭和51年1976

遺跡名	調査年度	掲載報告書
東京都・豊田寺坂遺跡	昭和51年 1976	「東京都・豊田寺坂遺跡」 『立正大学考古学研究室彙報』第19号 昭和53年1978
東京都・中和田横穴墓群	昭和51年 1976	坂詰秀一・池上悟「東京都多摩市中和田横穴墓群の調査」 『考古学ジャーナル』第130号 昭和51年1976
福岡県・小田浦遺跡群	昭和51年	『牛額小田浦遺跡群』（大野城市教育委員会） 平成5年1993
栃木県・乙女不動原瓦窯跡	昭和52年 1977	坂詰秀一「乙女不動原瓦窯跡確認調査報告」 『立正大学考古学研究室彙報』第17号 昭和52年1977
ネパール・ティラウラコッ ト遺跡（第8次）	昭和53～54 年 1978～79	中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一編 『TILAKURAKOT II』 昭和52年1977 『TILAKURAKOT I』 平成12年2000
東京都・天沼窯跡	昭和54年 1979	「武蔵・天沼窯跡」 『立正大学考古学研究室彙報』第21号 昭和56年1981
八坂前窯跡（第2次）	昭和55年1980	『八坂前』（『立正大学考古学研究室報告』2） 昭和58年1983
ネパール・ティラウラコッ ト遺跡（補足調査）	昭和53～54年 1976～77	中村瑞隆・久保常晴・坂詰秀一編 『TILAKURAKOT II』 昭和52年1977 『TILAKURAKOT I』 平成12年2000
千葉県・阿弥陀堂遺跡	昭和56年 1981	立正大学考古学研究室『安房・華房蓮華寺の調査』 昭和59年1984
千葉県・龍正院瓦窯跡	昭和56年 1981	立正大学考古学研究室「下総・龍象印が窯跡群」 『立正大学考古学研究室彙報』第22号 昭和57年1982
千葉県・南河原坂窯跡	昭和57～平成 元年	千葉市文化財調査協会『土気南遺跡群Ⅶ』 平成8年1996
神奈川県・熊ヶ谷横穴墓群	昭和57～58年	立正大学考古学研究室『武蔵・熊ヶ谷横穴墓群』 昭和60年1985
神奈川県・熊ヶ谷東遺跡	昭和58～59年	立正大学考古学研究室『武蔵・熊ヶ谷東遺跡』 昭和61年1986
東京都・大井鹿島遺跡	昭和58～59年	立正大学考古学研究室『武蔵・大井鹿島遺跡』 昭和60年1985
栃木県・大和久古墳群	昭和60年1985	立正大学考古学研究室『下野・大和久古墳群』 昭和62年1987
千葉県・西大須賀横穴墓群	昭和60年1985	
千葉県下総町所在古墳実測 調査	昭和61年 1986	『下総町史』（現視・古代・中世編） 平成2年1990
東京都・仙台坂遺跡	昭和61～63年 1986～1988	「江戸・仙台坂遺跡」 『立正大学考古学研究室彙報』第25号 平成3年1991
長野県・上ノ山・菖蒲平窯跡 群	昭和62年 1987	『筑摩東山 上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告』 平成9年1997
千葉県・山田宝馬65号墳	平成2年	『芝山町史』（現視・古代編） 平成4年1992
千葉県・中山法華経寺祖師 堂	平成2～3年 1990～1991	「中山法華経寺・祖師堂」『千葉県史・中世考古資料編』 『中山法華経寺・祖師堂発掘調査報告書』 平成13年2001
神奈川県・大磯横穴墓群	平成2～6年	『大磯町の横穴墓群』大磯町郷土資料館 平成6年1994
東京都・近世大名家墓所の 調査	平成13年 2001	
東京都・あきる野市内石塔 群の調査	平成9年 1997	「東京都あきる野市伊奈千日堂出土石製塔婆について」 『立正考古』第37号 平成10年1998
東京都・法禅寺石塔群	平成9年	『品川区史料』10 品川区教育委員会 平成9年1997
神奈川県・龍前院石塔群	平成10年	「龍前院の石造物」『考古学論究』第10号 平成16年2004
千葉県・等覚寺松平外記家 墓所	平成10年 1998	
神奈川県称名寺石塔群	平成11年 1999	池上悟「称名寺境内所在石塔の概要」『称名寺の石造塔』 史跡称名寺境内石造物調査報告書 平成14年2002
埼玉県・野上下郷	平成10・11年 1998～1999	池上悟「板碑石材原産地周辺における調査」 『文学部論叢』第114号 立正大学文学部 平成13年2001
栃木県・足利市域石造物 所在調査	平成9～18年 1997～2006	「平成9～18年度足利市域石造物所在調査報告」 『平成9～18年度文化財保護年報』平成10～19年 『足利の石造物』足利市教育委員会 平成20年2008
千葉県・佐原市板碑所在調 査	平成12～15 2000～2003	池上悟「下総型板碑の変遷」 『佐原の歴史』第4号 平成16年2004

遺跡名	調査年度	掲載報告書
島根県・石見銀山妙正寺の石造物調査	平成 12 年 2000	『石見銀山・妙正寺跡』石見銀山石造物調査報告書 1 平成 13 年 2001
島根県・石見銀山龍昌寺の石造物調査	平成 13 年 2001	『石見銀山・龍昌寺跡』石見銀山石造物報告書 2 平成 13 年 2001
千葉県・佐原市古墳実測	平成 13 年 2001	池上悟「佐原市内所在古墳実測調査報告」 『佐原の歴史』第 2 号 平成 14 年 2002
東京都・近世大名家墓所調査	平成 13 年 2001	坂詰秀一編『池上本門寺近世大名墓所の調査』 『立正大学文学部考古学研究室調査報告』第 3 冊 平成 15 年 2003
千葉県・観福寺の石塔群調査	平成 14 年 2002	池上悟「観福寺所在の伊能三郎右衛門家墓地」 『佐原の歴史』第 3 号 平成 15 年
島根県・石見銀山 安養寺・大安寺・大龍寺の石造物調査	平成 14 年 2002	『石見銀山・安養寺・大安寺跡・大龍寺跡・奉行代官墓所他』 石見銀山石造物調査 3 平成 15 年
栃木県・足利市明神山古墳群	平成 14～16 年 2002～2004	「足利市明神山古墳群測量調査」『立正考古』第 41 号 平成 16 年 2004
島根県・石見銀山 長楽寺の石造物調査	平成 15 年 2003	『石見銀山・長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地』 石見銀山石造物調査報告書 4 平成 16 年 2004
島根県・石見銀山	平成 16 年 2004	『石見銀山・分布調査と墓石調査の成果』 石見銀山石造物著差報告書 5 平成 17 年 2005
島根県・石見銀山 温泉津地区恵珠寺の石造物調査	平成 17 年 2005	『石見銀山・温泉津地区恵珠寺墓地』 石見銀山石造物調査報告書 6 平成 18 年 2006
埼玉県・熊谷校地内遺跡 j 地点	平成 17 年 2005	『立正大学熊谷遺跡室年報』11 平成 17 年 2005
栃木県・羽黒古墳	平成 17 年 2005	池上悟「栃木県足利市所在・羽黒古墳測量調査報告」 『立正考古』第 47 号 平成 22 年 2010
栃木県・奥戸遺跡	平成 17～23 年 2005～2011	『奥戸遺跡発掘調査報告書』足利市教育委員会 平成 25 年 2013
東京都・近世大名細川家墓所	平成 18～20 年 2006～2008	
島根県・石見銀山 温泉津地区西念寺の石造物調査	平成 18 年 2006	『石見銀山・温泉津地区の石造物分布と西念寺墓地悉皆調査(1)』石見銀山石造物調査報告書 7 平成 19 年 2007
埼玉県・熊谷校地内遺跡 k・l・m・n・o・p・q 地点	平成 18 年 2006	『立正大学熊谷遺跡調査室年報』12
島根県・石見銀山 温泉津地区西念寺の石造物調査	平成 19 年 2007	『石見銀山・温泉津地区の石造物分布と西念寺墓地悉皆調査(2)』石見銀山石造物調査報告書 8 平成 20 年 2008
埼玉県・熊谷校地内遺跡 u・v・w・x・y・z 地点	平成 20 年 2008	池上悟『立正大学熊谷遺跡室年報』13 平成 21 年 2009
栃木県・足利学校庫主墓	平成 20 年 2008	「足利学校庫主墓地について」『学校』第 7 号 平成 21 年 2009
栃木県・田中町 2 号墳	平成 21 年 2009	『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』
栃木県・長林寺裏古墳	平成 22～24 年	『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』
埼玉県・熊谷市近世石造物調査	平成 23 年 2011	
島根県・石見銀山 本経寺墓地	平成 25 年 2013	『石見銀山・大谷地区本経寺墓地の調査』石見銀山石造物調査報告書 13 2014
東京都・池上本門寺大名墓及び近世墓調査	平成 24 年 2012	
埼玉県・熊谷校地内遺跡①地点	平成 25 年 2013	池上悟『遺跡調査室年報』14 平成 26 年 2014

遺跡名	調査年度	掲載報告書
群馬県・桐生市石造物調査	平成 25～令和 3 年	
島根県・石見銀山 石銀地区・字甚光院の石造 物調査	平成 26 年 2014	『石見銀山・石銀地区墓Ⅰ・墓Ⅱ東・墓Ⅲ東・墓Ⅳ・墓Ⅴの 石造物調査； 枋畑谷地区字甚光院の石造物調査』石見銀山石造 物調査報告書 14 平成 27 年 2015
島根県・石見銀山 昆布山谷地区妙本寺上墓 地・虎岸寺跡	平成 27 年 2015	『石見銀山・昆布山谷地区妙本寺上墓地 E 地点・G 地点虎岸寺 跡』石見銀山石造物調査報告書 平成 28 年 2016
島根県・石見銀山 妙本寺上墓地	平成 28 年 2016	『石見銀山・昆布山谷地区妙本寺上墓地 A 地点』 石見銀山石造物調査報告書 17 平成 29 年 2017
島根県・石見銀山 妙本寺上墓地	平成 30 年 2018	『石見銀山・昆布山谷地区妙本寺上墓地 B・C・D・F・H 地点』石 見銀山石造物調査報告書 18 平成 31 年 2019
島根県・石見銀山 龍源寺間歩上墓地・妙像寺 墓地	令和元年 2019	『枋畑谷地区龍源寺間歩上墓地・妙像寺墓地』 石見銀山石造物調査報告書 19 令和元年 2020
ウズベキスタン・カラ・テペ 遺跡学術調査	平成 26～令和 2 年 2014～2020	『カラ・テペテルメズの仏教遺跡』ウズベキスタン共和国科ア カデミー芸術学研究所・立正大学ウズベキスタン学術調査隊 令和 2 年 2020

【引用・参考文献】

- 坂詰秀 1994 「立正考古学 一九三〇―一九五九」『立正大学文学部論叢』100 立正大学文学部
久保常晴 1964 「祝賀号の刊行にあたって」『立正史学』第28号 石田先生古稀祝賀号
久保常晴 1967 『仏教考古学研究』ニューサイエンス社
久保常晴 1977 『続仏教考古学研究』ニューサイエンス社
久保常晴 1983 『続々仏教考古学研究』ニューサイエンス社
立正大学考古学研究室 2012 日本考古学協会第七十八回総会記念『立正考古学の歩み（Ⅱ）』
坂詰秀一 1967 「あとがき」『仏教考古学研究』ニューサイエンス社
坂詰秀一 2006 『私の考古遍歴』雄山閣
立正大学文学部考古学研究室 1997 日本考古学協会第63回総会記念『立正大学の考古学展』立正大学文学部考古学研究室
立正大学考古学会 1938 『日蓮宗金石文拓本展―目録―』
立正大学考古学会 1932-1958 『銅鐸』創刊号～14号
立正大学考古学会 1933 『考古学入門』
江南町町史編さん委員会 1995 『江南町史』資料編1 考古 江南町
坂詰秀一 1980 「窯跡出土資料による関東地方須恵器の編年」『立正大学人文科学研究年報』第17号
立正大学博物館『館蔵資料「基礎文献」叢刊 第1輯 久保常晴氏収集寄贈 樺太考古資料』
立正大学博物館『館蔵資料「基礎文献」叢刊 第2輯 吉田格氏収集寄贈 縄文文化資料』
立正大学博物館『館蔵資料「基礎文献」叢刊 第3輯 埼玉県熊谷市 野原古墳群発掘調査報告書』
立正大学博物館『館蔵資料「基礎文献」叢刊 第5輯 茨城県稲敷市 浮島前浦遺跡・浮島原古墳群発掘調査報告書』
立正大学博物館『館蔵資料「基礎文献」叢刊 第7輯 東京都多摩市 中和田横穴墓群発掘報告書』
上野恵司 2008 『東国古墳文化論攷―上野恵司先生著作集』

立正大学博物館 第15回特別展

立正の考古学

令和3（2021）年3月15日

編集・発行：立正大学博物館

〒360-0194 熊谷市万吉 1700

Tel. 048-536-6150

<https://www.ris.ac.jp/museum/>

印刷・製本：ヂサイ印刷株式会社

